

学会ハイライト

第80回日本皮膚科学会東部支部学術大会を終えて —デルマトオーケストラ誕生記—

(平成28年10月29日(土), 30日(日), 浜松コンベンションセンター/オークラ浜松アクトシティホテル)

戸倉 新樹

浜松医科大学皮膚科学 教授

はじめに

第80回日本皮膚科学会東部支部学術大会を、浜松市で浜松医科大学皮膚科学教室が担当させていただいた。時は2016年10月29, 30日である。会場は、浜松駅に隣接する浜松コンベンションセンターとオークラ浜松アクトシティホテルであった。参加者は約950名で、多くの一般演題を頂戴した。浜松医科大学が担当する東部支部学術大会は、初代教授山田瑞穂先生、二代教授瀧川雅浩先生のときにも開催されており、今回は3回目であった。

皮膚科の学会は多々ある。何か今までやられていないことをやりたい、という思いだけがあった。

デルマトオーケストラ

テーマは「デルマトオーケストラ：Dermato-Orchestra」とした。常日頃から皮膚科学教室を結集させ、巧みに組織化するというを考えているが、それを表す造語である。「orchestrate」は巧く結集させるという意味なのであるが、cleverで器用な組織化、もっといえば時には不正に組織化するという狡猾な意味でも使われるようである。私が毎日毎日行っていることは、皮膚科あるいは皮膚科学に関する診療、皮膚科学研究、地域での医療連携、国際的な交流、大学講座、専門医教育等々について、いかにorchestrateするかということのような気がする。それでこのようなテーマを思いついた。

しかし、このテーマにはもう一つ大きなミッションがある。2015年の11月末にフィンランドのラハティ交響楽団が東京のオペラシティでシベリウス全交響曲チクルスを三晩演奏した。私はシベリウスに傾倒し、なんとかやり繰りして二晩演奏会を聴いた。胸が一杯になる感動的な演奏会だった。それは演奏がうまいということとちょっと異なる。席は2列目と3列目だったので、第一ヴァイオリンの一人ひとりの演奏と演奏後の表情・仕草を間近にみる事ができた。楽団員が、このローカルなオーケストラの中で演奏し、構成演奏者として調和し、反発し、自分の思いを成就させ、全体としてのオーケストラのカラーは保とうとしている、そういう様に立ち会えたのは、得難い体験であった。われわれが皮膚科を通じてやっていることも酷似している。それが組織の中であればなおさらである。こうした体験を享受したい、分かち合いたいという思いもあって、学術大会の文化活動として、皮膚科医によるオーケストラ演奏会を行った(図1)。御託を並べたが要するにやりたかったのである。

実は音楽好きの私は、デルマトオーケストラのようなことをやりたいと以前から狙っていた。しかし実行に移すとなると巨大なエネルギーやいくばくかの費用が要るので、躊躇していた。今回、この企画にとってちょうど良い規模の学会を浜松で主催させていただく機会を得た。私自身も相当

の年齢になり、多少のハメを外しても許されるであろうと確信し、思い切った。浜松は音楽の町、楽器の町であるし、後ろ指をさされない環境もある。さらに学会に合わせてアクトシティ大ホールも借りることができ、最高の舞台も得た(図2)。

当初、日本列島の東半分で活躍する皮膚科医によるオーケストラ演奏を画策していた。しかし実際は、北海道から鹿児島まで、全国の皮膚科医が集まってくださった。問題は事前の練習である。個々人の練習時間を確保することも重要であるが、全体練習は必須で、さらに重要である。こうした練習時間の問題は、集中力と音楽する喜びで乗り切るしかない。結局、乾癬学会が終わった2016年9月4日に東京の雑司が谷にある教育センターで1回、10月2日に浜松市内のホールで1回、練習を行ったのみである。さりとて全員が集まったわけではない。書入れ時は演奏会前日である。10月28日金曜日に仕事を終えた方々が各地から浜松に集結し、17時ごろから夜遅くまで練習をした。私はフルートを吹いたが、学会長としての仕事も多々あり、前日練習にはあまり参加できなかった。フルーティストは会長招宴会で飲んでいたが、楽団員の多くは必死にリハーサル室で練習していたのである。翌日、ホルンを吹いた鶴田大輔先生の口唇が腫れていたことを確認するのも忘れなかった。



図1 デルマトオーケストラのポスター。絵は武田理恵さん。

この演奏会の実現に当たって1年以上前から、浜松医科大学の同級生でそれぞれ別の仕事場で皮膚科医として活躍されている柳生理映子、吉田亜



図2 デルマトオーケストラ演奏会。



図3 左から福永、吉田、戸倉、柳生(敬称略)。

希、福永有希の各先生に幹事として大変ご尽力をいただいた。彼女たちがいなければデルマトオーケストラは実現することはなかった。私がどれくらい心から感謝しているか、胸を開いて見せたいくらいである。戸倉ポーズを要求しても、受入れてくれる寛容さと慈悲もある(図3)。もちろん全国から集まってくださった皮膚科医の方々、その他の医療関係者、賛助出演いただいた何人かの方々、そして指揮者として演奏をまとめてくださった岡輝明先生(関東中央病院病理科)の献身的貢献にも心より感謝の意を表したい。実は第一ヴァイオリンの後列にSoon Shim Hanさん(ソウル大学皮膚科Cho教授の奥様)が加わってくれた。彼女は、韓国KBS交響楽団の団員を今年まで務めた。彼女を呼ぶためにCho教授を座長として招請したのであるが、その魂胆はCho先生にバレていた。「私ではなく、妻が呼ばれた」と。

メインの曲は私が大好きなシューベルトの第5交響曲を選んだ。美しい独特の旋律、そして景色がパッと変わる転調が、われわれを別世界に誘ってくれる曲である。こんな色合いは他の作曲家ではなかなか味わえない。なんと19歳のときの作品である。私は62歳まで何をしていたのだろうか。シューベルト第5交響曲の前に、同じ楽器編成で同曲の手本となったとされるモーツァルトの第40

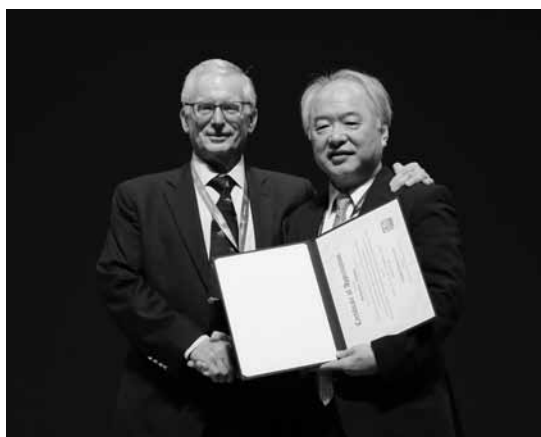


図4 Edelson教授と戸倉。

番交響曲の第1楽章を演奏した。アンコールは同曲の第3楽章とした。実際の演奏会では、アンコールのときに、「家康くん」も登場し、お子様でも楽しめる音楽会になった。私は家康くんから花束もらったが、これは私に内緒で計画されていた。わが医局も狙っている。練習と本番を通じて、胸が一杯になる、「プレイヤーズ・ハイ」ともいうべきあの瞬間が味わえたのはいうまでもない。皮膚科医でもここまでできることを示せたのではないかとこの自信とともに、今、CDを作製している。

皮膚リンフォーマ

すっかり皮膚科の話ではなく、デルマトオーケストラの話に夢中になってしまった。ここで筆を置けば、私の短い将来はさらに短くなるであろう。急いで舵を皮膚科に切ろう。

浜松医科大学皮膚科は山田瑞穂先生、瀧川雅浩先生、そして私と皮膚リンフォーマの臨床・研究を行ってきた。この疾患は重要な疾患であることは皮膚科医が知るところではあるが、一方では毛嫌いする方も多かもしれない。残念である。皮膚リンフォーマについて米国Yale大学のRichard Edelson教授(図4)にご参加いただき、特別講演とシンポジウムを行った。Edelson教授はcutaneous T cell lymphoma (CTCL) という言葉を用いた最初



図5 Yale Reunion.

の研究者であり、一貫してCTCLの基礎的および臨床的研究を行ってこられた。とくにextracorporeal photopheresis (ECP, フォトフェレーシス)という体外循環PUVA療法を考案し、腫瘍免疫機構の増強という観点からそのメカニズムを研究されてきた。ECPは欧米では多くのCTCL患者や臓器移植後のGVHD患者に対して使われているが、残念ながら日本では承認に至っていない。Edelson教授の講演に引き続いてのシンポジウム「皮膚T細胞リンパ腫とその周辺」では、免疫の場としての皮膚(iSALT)を舞台に、CTCLがある種のT細胞レパトア集団として生起することが討論された。また成人T細胞白血病(ATL)での樹状細胞を介したHTLV-1伝播様式について紹介され、HDAC阻害薬や抗CCR4抗体の治療効果の裏づけと副反応について講演された。

ちなみに、Edelson教授が来日された機会を利用してYale Reunionを学会に先んじて催し、日本からYale大学に留学された先生方にお集まりいただいたことを記しておきたい(図5)。瀧川先生、井階先生の思い出の貴重なスライドに見入ってしまった。

その他のプログラム

その他に、私が興味をもち、また教室の研究対象になっているテーマについて、参加者にも興味

をもっていただけるようなシンポジウムあるいはスポンサードセミナーをいくつか企画した。その意図と内容をダイジェストしたい。しかし何といても東部支部学術大会の重要なプログラムは一般演題であった。会員の皆様からの興味深い演題発表と討論があったことがもっとも重要と認識している。

1. 乾癬

学会会期中の10月29日はちょうど世界乾癬デーに当たった。したがって、学術プログラムとして乾癬に関するシンポジウムを企画した。主に治療に関わる話題を提供していただき、それを討論した。浜松医科大学にとっても乾癬の臨床研究を推進しているところであり、とくに生物学的製剤やビタミンD₃外用薬(合剤)の皮膚浸潤T細胞に対する治療効果は興味の対象である。また学術セッションだけではなく、日本乾癬患者連合会による患者会も催していただいた。皮膚科医の先生にも講師をお願いし、盛況な患者会となった。患者会と静岡県内の医療機関のつながりも促進されたと思う。

2. メラノーマ

メラノーマの治療は、近年、免疫療法を中心に大きく進展している。浜松医科大学でも瀧川先生の教授時代に、経皮ペプチド免疫療法を発案し、実際に患者に行ってきた。腫瘍免疫が理論展開の

みならず効く治療へと結実したのは、抗PD-1抗体や抗CTLA-4抗体の登場によってである。しかしその前からメラノーマ腫瘍抗原を利用した治療については、さまざまな取り組みがあった。最近、腫瘍細胞と細胞傷害性T細胞をつなぐ共刺激分子にはいくつかの組み合わせがみつかり、臨床応用される可能性を秘めている。また、BRAFやMEK阻害薬も含め、こうした薬剤をどのような順序で、どのような期間を空けて投与するかは判然としない。また医療経済的に併用療法をどうするかという問題も大きい。

3. 皮膚バリア異常とアトピー性皮膚炎

皮膚バリアの構造と機能は、10年前のアトピー性皮膚炎患者での高頻度のフィラグリン遺伝子変異の発見以来、大きな進歩を遂げた。角層バリアやタイトジャンクションバリアに関する知見は目覚ましいものがある。それをどう解釈し、どのように日常マネジメントとして臨床に応用していくかの問いに答えるシンポジウムを行った。角層バリアの破綻は、食物アレルギーなど他のアレルギーも誘導し、皮膚以外のアレルギーにおける経皮感作の存在は周知の事実となった。こうした考えにもとづいて、今後新たな展開が待ち受けていることも想定される。

4. 薬疹

日皮会東部支部企画研修講習会のテーマとして薬疹の講演会を行った。薬疹に関わる最近の話題は、薬疹発症に与える遺伝子多型の影響、重症型薬疹のバイオマーカー、Th17細胞などT細胞ポピュレーションと薬疹、薬剤反応性角化細胞、膿疱性乾癬とAGEP、など多岐にわたる。これらにつき話題提供され、若い聴講者は薬疹について開眼したことと思う。一方では、薬疹は登録システムが重要な課題となっており、これについても会期中に議論された。

5. 脱毛症

脱毛症の診療は、乏毛症の遺伝子変異がかなりの部分明らかにされ、大きな進展を遂げた。一方では円形脱毛症をはじめとする後天性脱毛の臨床

的対処は、日常診療において現在も大きなウェートを占めている。こうした疾患の病態解明は治療につながる可能性が大であるだけに、推進すべきであろう。事実、円形脱毛症の免疫学的なメカニズムが明らかになるにつれ、生物学的製剤の導入の動きもみられる。円形脱毛症の病態に登場する細胞や分子は多く、形質細胞様樹状細胞もわれわれの研究によって初期の病態に関わることが提唱されている。ここでのミニシンポジウムではこうした点につき、講演がなされた。

6. 制御性B細胞(regulatory B cell : Breg)

制御性T細胞(Treg)については非常に多くの知見が得られ、T細胞の亜群としての地位が確立されて久しく、また皮膚科的にもそれぞれリンフォーマやメラノーマに用いられる抗CCR4抗体や抗CTLA-4抗体の作用のかなりの部分がTreg阻害による腫瘍免疫の亢進であることがわかり、治療応用されている。Tregと並んで免疫抑制リンパ球としてBregの存在も提唱され、皮膚疾患についても病態に関わることが提唱されている。本学会のミニシンポジウムとして、皮膚科からみたBregを中心にご講演いただいた。

7. コリン性蕁麻疹

蕁麻疹の中で特異な位置を占めるこの型は、皮膚科医にとって大きな興味の対象であり、また治療法が確立していないだけに尽力すべき疾患である。また発汗低下を伴う減汗性コリン性蕁麻疹と後天性特発性全身性無汗症(AIGA)の関係は同一疾患のフェノタイプの差異としてとらえられるようになり、さらにAIGAが指定難病となり話題性がある。われわれの施設でもコリン性蕁麻疹の臨床的研究を行っており、ミニシンポジウムとして討論の場を設けることができた。

8. IgG4関連疾患

自己免疫性膵炎とミクリッツ病に端を発するIgG4関連疾患は、わが国で確立された疾患概念である。皮膚科領域でもIgG4関連疾患の皮膚病変は多くの報告をみるようになり、IgG4関連皮膚疾患と呼称されている。われわれはIgG4関連皮膚疾患

を7つの型に分けることを提唱しているが、オリジナルのIgG4関連疾患と同様に、明確な定義や鑑別疾患や周辺疾患との異同は議論があるところである。とくにIgG4関連疾患と多中心性Castleman病の関連は、同じ疾患スペクトラム上にあることを示唆する症例も少なくない。本ミニシンポジウムでは他科領域の専門家と症例をもとにして議論することで有意義な意見交換ができた。

9. 浜松医科大学女性医師支援センター講演会

私は現在、浜松医科大学女性医師支援センター長であるため、この学会を利用して女性医師支援のための講演会を催した。講師は旭川医科大学の山本明美教授にお願いし、日皮会の島田理事長にも終始ご出席いただき、ご意見を伺った。子育て中の女性医師が常勤医となるためには、当直や拘束の問題があることを改めて最重要課題の一つと認識した。

10. 皮膚疾患のポイント集, CPC, 研修医・学生からみた皮膚科, 専門医指導医講習会

皮膚科のポイント集では、最近話題の疾患について短時間に知識が得られるように、それぞれの専門の先生に教授いただいた。東部支部企画としてここしばらく毎年続けているCPC, 研修医・学生からみた皮膚科では、それぞれ担当の先生に尽力いただいた。専門医指導医講習会は、当初2017年からの新専門医制度を見据えてのものであったが、同年での新制度移行はなくなっている。

おしまいに

最後に今回の学会を無事に終えることができ、伊藤泰介事務局長はじめとする教室員、ご支援いただいた同門会(木公会)会員、完璧なアレンジをしてくださった日皮会学会チームの方々、ご参加いただいた皆様、そしてデルマトオーケストラのメンバーに深謝申し上げたい。